

主題研究

小学校における児童の 人間関係能力を育てることに 関する研究

（第1報）

教育相談室

齋藤 誠 一

研究協力校

石鳥谷町立石鳥谷小学校

研究の概要

この研究は、小学校中学年において、個と個の人間関係を身に付け、人間関係をより深いものにしていく集団体験活動をと
おして、人間関係能力を育てる教育相談の在り方を明らかにし、
学校における教育相談の充実に役立てようとするものである。

本年度は、2年次研究の第1年次として、次の成果を得た。

人間関係能力を育てることについての基本的な考え方及
び集団体験活動を取り入れる意義を検討し、中学年の児童
の人間関係能力を育てるための基本構想を立案したこと

基本構想に基づいて、実態調査の分析・考察を行い、小
学校中学年における集団体験活動を取り入れた人間関係能
力を育てるための指導・援助試案を作成したこと

キーワード：小学校中学年 人間関係能力 集団体験活動 肯定的な相互評価
自己理解 他者理解 はたらきかけること 認め合うこと

目 次

研究の目的	39
研究結果の分析と考察	39
1 児童の人間関係能力についての基本的な考え方	39
2 中学年において集団体験活動を取り入れる意義	40
3 中学年の児童の人間関係能力を育てることについての基本構想	40
4 中学年の児童の人間関係についての実態調査及び分析・考察	41
(1) 調査の概要	41
(2) 調査結果とその分析・考察	42
(3) 指導・援助試案作成上の課題	46
5 中学年の児童の人間関係能力を育てることについての指導・援助試案	46
(1) 中学年の児童の人間関係能力を育てるための指導・援助に当たっての配慮事項	46
(2) 中学年の児童の人間関係能力を育てるための指導・援助試案	46
研究のまとめと今後の課題	48
1 研究のまとめ	48
2 今後の課題	48
【引用文献】	48
【参考文献】	48

研究の目的

学校におけるいじめや不登校、校内暴力等の諸問題は、社会生活の変化に伴う人間関係の希薄化に起因するものが多い。これらの問題の解決に向けては、日々の教育活動において、児童個々の人間関係能力を育てる教育相談を位置付けることが必要である。

しかし、学校における教育相談は、児童個々に対して問題解決や自己実現への歩みを促すような互いを認め合い尊重する人間関係を十分に育てているとは言い難い。

このような状況を改善するためには、互いにはたらきかけ、自他の違いやよさに気づき、自分も相手も大切にしようとする人間関係能力を育てることが重要である。そのために、個と個の人間関係を身に付け、それを集団の中で繰り返しながら人間関係をより深いものにしていく集団体験活動が必要である。

そこで、この研究は、小学校における児童の人間関係に対する意識と実態の問題点と課題を把握し、集団体験活動をとおして、人間関係能力を育てる教育相談の在り方を明らかにし、学校における教育相談の充実に役立てようとするものである。

研究結果の分析と考察

1 児童の人間関係能力についての基本的な考え方

児童期は、それまで親へ全面的に依存していた家族中心のタテの人間関係から、学校での生活が始まることにより、友達中心のヨコの人間関係へ移行する、つまり友達との関係が拡大する時期である。特に中学年はその移行が顕著であり、人間関係の大きな発達的变化が起こる時期である。しかし、不登校をはじめとする諸問題の原因に人間関係上の問題があることや、児童の否定的な自己評価が中学年以降から目立ってきていることを考えると、その主たる原因は、この中学年の時期の人間関係がうまく構築されていないことによるものととらえることができる。

中学年の時期は、それまで自己中心的であった友達との関係における自分の考えや行動が、友達との相互作用の中で相対的に把握され始める時期である。友達との比較や友達から受ける言葉や態度、行動から、自分はどんな人間かという自己評価が行われ始める。

しかし、社会生活の変化に伴う人間関係の希薄さは、児童相互の表面的なつながりを増し、互いの違いやよさを認め合うような関係性をはぐくまれにくいものとしている。その中で、自分のよさをあまりとらえられない児童は、「自分はどのように見られているのだろうか」「認められているのだろうか」「受け入れてもらえるだろうか」といった不安感を抱き、友達と同じであることに安心感を求め、よくないと思ったことでも同調行動をとったりすることがある。また、自分とは違うものは認めないといった排他性を有することもある。

このような、自分のよさをあまりとらえられない場合は、児童の自己評価は、友達との比較による自己評価が中心を占め、「友達と比べてできる、できない」といった優劣中心のとらえ方にとどまってしまうがちである。これは、友達を自分との優劣関係で見ってしまうことにもつながってくる。このような中で、児童は常に不安感をもったり、その不安感から逃れるために、友達とのかかわりを避けたりするようになる。このことは、さらに友達との関係を希薄にし、多くの友達がほしいという欲求があっても、実際には友達を増やす行動をとれなかったり、友達がほしいという欲求自体が失われていったりすることにつながることも考えられる。

その結果、互いを認め合うような機会も少なくなり、望ましい人間関係が構築されないままの状態が続いてしまう。それが、不登校、集団不適応、いじめ等の問題にも深く結び付いていることも考えられる。

これらのことから、中学年の児童が人間関係を構築するためには、友達との相互関係において、互いにはたらきかけながら楽しさを味わい、かかわりを広げ、多面的で肯定的な相互評価により自己理解や他者理解を深めることが必要である。その肯定的な相互評価は互いを大切にすることでもある。そこで、本研究では、「互いにはたらきかけ、自他の違いやよさに気付き、自分も相手も大切にしようとする事」を中学年の児童に特に必要な人間関係能力ととらえることとする。この人間関係能力は、その後の人間関係づくりにとって非常に重要なものであると考える。

2 中学年において集団体験活動を取り入れる意義

児童の人間関係能力を育てるためには、より多くの友達とのかかわりが必要である。限られた友達だけでなく、多くの友達とのかかわりの中で自己理解や他者理解を深めることで、より多面的で肯定的な見方をすることができる。このことにより、児童は自己のよさをより認識でき、また、集団への所属感を得ることができる。よって、中学年における人間関係能力を育てる上で、友達とのかかわりをもつために「はたらきかけること」と、互いの違いやよさを肯定的に相互評価する「認め合うこと」の二つが重要な要素であると考えられる。

「はたらきかけること」は、他者との関係を作るために行動することで、具体的には話しかけたり、何か活動するとき誘ったりすることである。そのことにより、かかわることの楽しさを感じたり関係を広げたりしていく。「はたらきかけること」は互いに認め合うために他者との関係を作る大切な要素である。

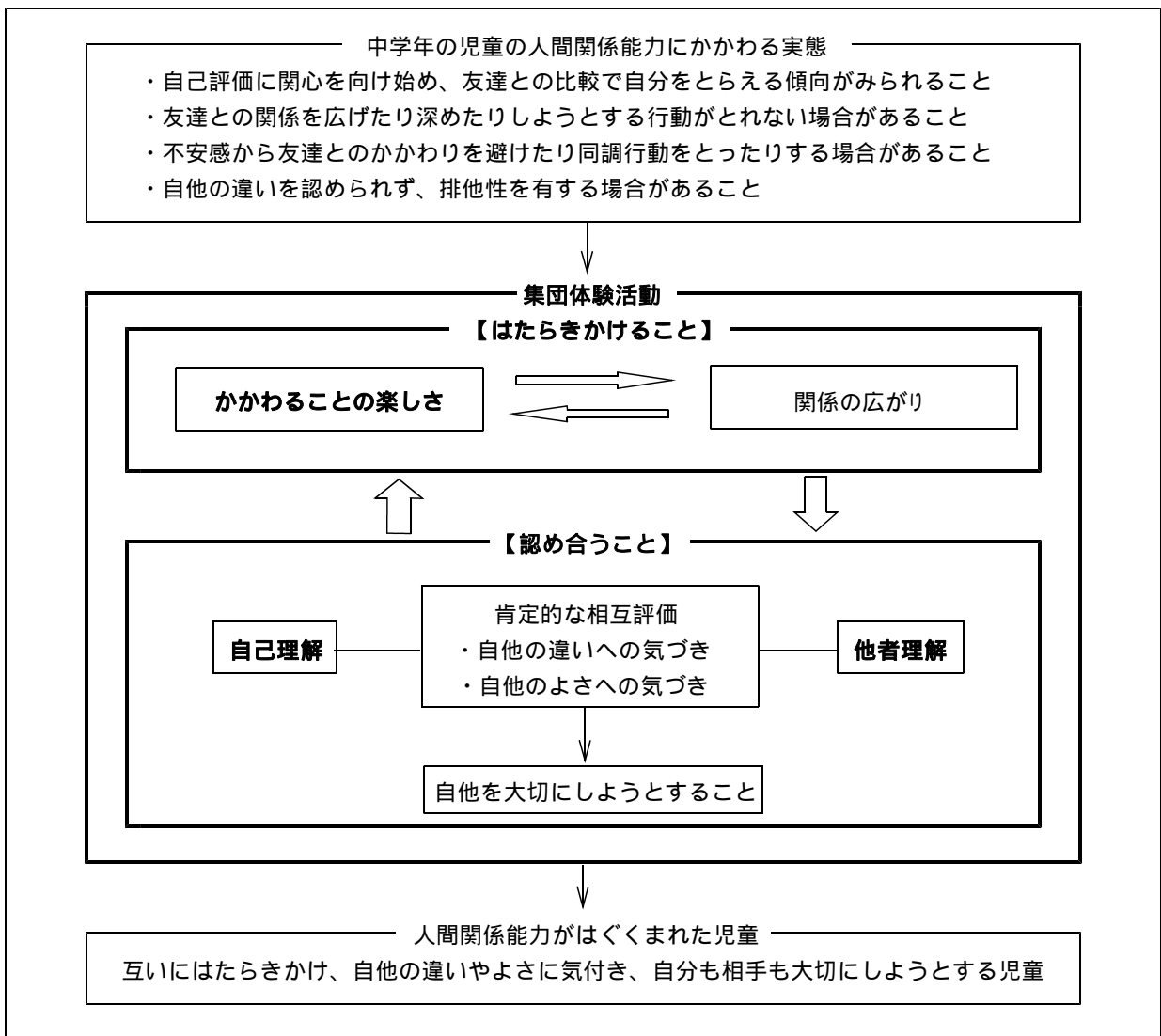
「認め合うこと」は、肯定的な相互評価を行っていくことである。他者とのかかわりの中で互いの違いやよさについて気付き、それらを互いに伝え合うことで自己理解や他者理解を深めることである。「認め合うこと」は、他者との関係を深める大切な要素である。違いやよさは、それぞれ他者と比較して優劣をつけるものではなく、それぞれがよいと感じている面であり個性である。この認識をもつためには、まず、違いやよさに目を向け、それらに気付いていくことが必要である。

こうした「はたらきかけること」「認め合うこと」について、集団体験活動をとおし、個々の成長を促すことが必要である。國分康孝は集団体験活動のメリットを、「模倣の機会が多く思考・感情・行動が変容すること、自分だけの悩みではないとわかり安心すること、多様な仲間から多様なコメント（フィードバック）がもらえるから洞察の機会が多いこと、試行錯誤の機会が多いこと、集団の規範に従うことが行動の変容を促進すること、集団への所属感が日常生活の支えとなること」と述べている。人間関係の中で育てられるものは、教えられ身に付くものではなく、実際に体験することをおして獲得されるものである。

これらのことから、「はたらきかけること」「認め合うこと」の二つの要素を盛り込んだ集団体験活動を日常生活の基盤となる学級での教育活動に位置付け、意図的・計画的に取り組むことは意義あるものであると考える。

3 中学年の児童の人間関係能力を育てることについての基本構想

児童の人間関係能力を育てることについての考え方及び集団体験活動を取り入れる意義をもとに、二つの要素を取り入れた中学年における集団体験活動の基本構想図を【図1】のように作成した。



【図1】 中学年の児童の人間関係能力を育てることについての基本構想図

それぞれの活動のねらいを達成させるためには、他者との基本的なかかわり方を習得する必要がある。そのために、集団体験活動の中に、他者との関係を作るための基本的なコミュニケーションスキルを盛り込んでいく。

4 中学年の児童の人間関係についての実態調査及び分析・考察

(1) 調査の概要

中学年の児童の人間関係能力を育てるために必要な二つの要素、「はたらきかけること」「認め合うこと」について実態調査をし、中学年における人間関係能力を育てるための指導・援助試案作成に必要な資料を得ることを目的として、研究協力校の児童と教師を対象に実態調査を行った。【表1】は実態調査の概要、【表2】【表3】は実態調査の観点と項目である。

【表1】 実態調査の概要

回収率100%

学年	男子(人)	女子(人)	合計	調査期日	調査方法
3年生	41	40	81	平成15年 11月17日	研究担当者が作成した調査用紙を用いて、担任が実施
4年生	36	38	74		
合計	77	78	155		

【表 2】 児童の実態調査の観点と項目

調査の観点	設問番号	調査項目
ア はたらきかけることについて	1	学級での生活の楽しさについて
	2	友達との関係を広げる意欲について
	4	1 他者へはたらきかける行動について
		2 他者へはたらきかける意識について
	8	1 他者の話を聞くことについて
2 話を聞くときに頑張りたいことについて		
イ 認め合うことについて	10	他者と比較する内容について
	6	他者との比較による自己評価について
	11	1 他者との意見の違いに対する意識について
		2 他者との意見の違いに対する行動について
	7	他者をほめることについて
	3	他者からほめられることについて
	9	自分のよさをとらえることについて
5	他者のよさをとらえることについて	

【表 3】 教師の実態調査の観点と項目

調査の観点	設問番号	調査項目
ア はたらきかけることについて	1 - 1	他者とのかかわりの実態について
	1 - 2	かかわりをもつことへの配慮について
	1 - 3	気持ちや考えを話したり聞いたりすることの実態について
	1 - 4	気持ちや考えを話したり聞いたりすることへの配慮について
イ 認め合うことについて	2 - 1	他者との比較の実態について
	2 - 2	他者と比較する内容と問題点について
	2 - 3	自分のよさをとらえることについて
	2 - 4	他者のよさをとらえることについて
	2 - 5	自他のよさをとらえるための配慮について

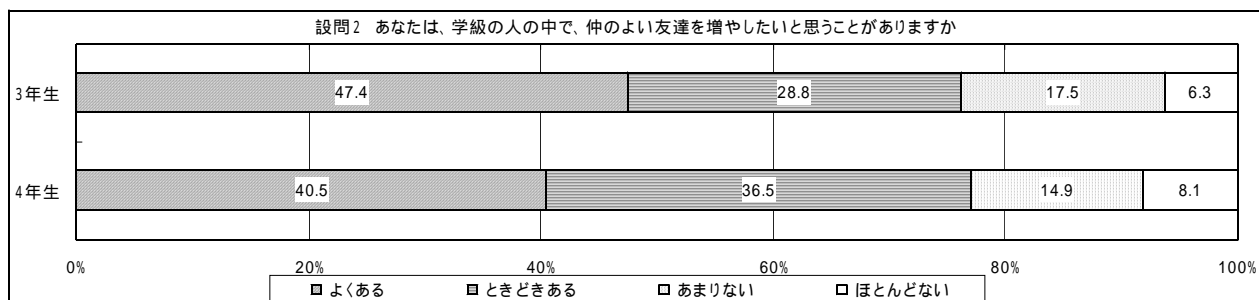
(2) 調査結果とその分析・考察

ア はたらきかけることについて

(ア) 友達との関係を広げる意欲について

「あなたは、学級の人の中で、仲のよい友達を増やしたいと思うことがありますか」という友達との関係を広げる意欲についてまとめたものが【図 2】である。

N = 3年生80 4年生74 単位(%)



【図 2】 友達との関係を広げる意欲について

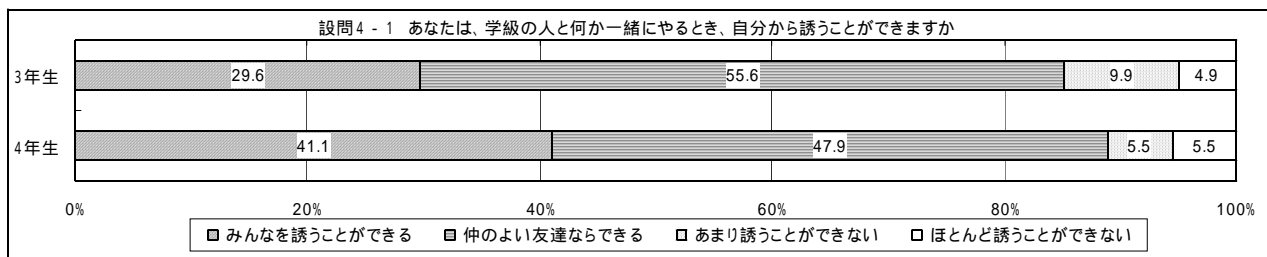
これによると、「よくある」と「ときどきある」を合わせると、3年生で76.2%、4年生では77.0%になっている。一方、「あまりない」と「ほとんどない」を合わせると、3年生で23.8%、4年生では23.0%である。3年生は、4年生に比べて「よくある」が多くなっている。

これらのことから、両学年とも8割近くの児童は友達を増やしたいという意欲をもっているものの、およそ2割の児童は、増やそうと思うことが少ないことが分かる。増やそうと思うことの少ない児童は、現状の友達との関係に満足していたり、友達が固定化されていたりしていることが考えられる。また、友達とかかわることについての抵抗感をもっていることも考えられる。

(1) 他者へはたらきかける行動について

「あなたは、学級の人と何か一緒にやるとき、自分から誘うことができますか」という他者へはたらきかける行動についてまとめたものが【図3】である。

N=3年生81 4年生73 単位(%)



【図3】 他者へはたらきかける行動について

これによると、「仲のよい友達なら誘うことができる」と回答した児童が最も多く、3年生で55.6%、4年生では47.9%になっている。「みんなを誘うことができる」は3年生で29.6%、4年生では41.1%で3年生の割合が低くなっている。「あまり誘うことができない」と「ほとんど誘うことができない」を合わせると、3年生で14.8%、4年生で11.0%である。

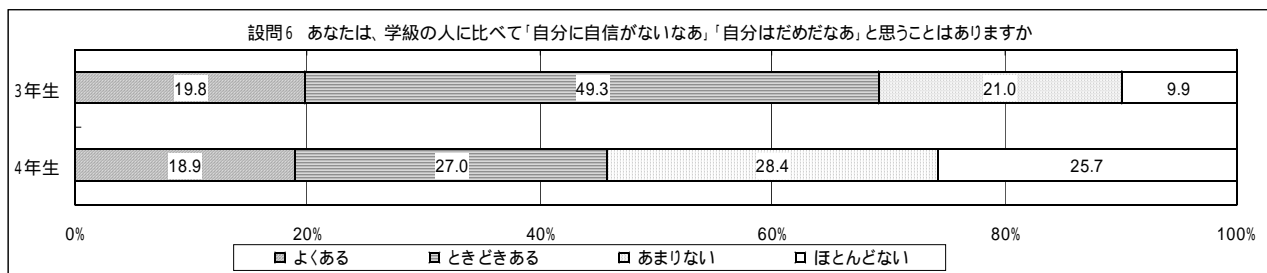
これらのことから、両学年とも友達を誘うことのできる児童は多いものの、仲のよい友達に限られている傾向があり、より3年生にその傾向がみられる。誘うことができないと回答した児童を含め、他者へはたらきかけることについて抵抗感をもっている児童が多いことが考えられる。

イ 認め合うことについて

(ア) 他者との比較による自己評価について

「あなたは、学級の人に比べて『自分に自信がないなあ』『自分はだめだなあ』と思うことはありますか」という他者との比較による自己評価についてまとめたものが【図4】である。

N = 3年生81 4年生74 単位(%)



【図4】 他者との比較による自己評価について

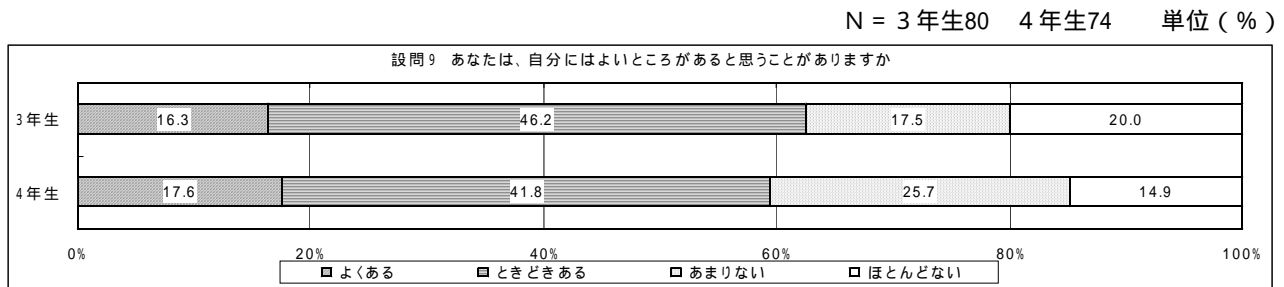
これによると、「よくある」と「ときどきある」を合わせると、3年生で69.1%、4年生では45.9%になっており、3年生は4年生より、「自分に自信がない」「自分はだめだ」と感じることもある

と回答している児童の割合が高いことが分かる。一方、「あまりない」と「ほとんどない」を合わせると、3年生で30.9%、4年生では54.1%である。

これらのことから、3年生は4年生に比べ、他者と比較し自己評価を低下させ、自分を否定的にとらえる傾向があると考えられる。また、4年生は比較すること自体が少なくなっていることや、比較以外の方法で自分をとらえ始めていることが考えられる。

(1) 自分のよさをとらえることについて

「あなたは、自分にはよいところがあると思うことがありますか」という、自分のよさをとらえることについてまとめたものが【図5】である。



【図5】 自分のよさをとらえることについて

これによると、「よくある」と「ときどきある」を合わせると、3年生で62.5%、4年生では59.4%になっている。一方、「あまりない」と「ほとんどない」を合わせると、3年生で37.5%、4年生では40.6%である。

これらのことから、両学年ともおよそ6割の児童が、自分を肯定的にとらえることがあるということが分かる。しかし、およそ4割の児童は、自分のよさをとらえることが少なく、自分を肯定的にとらえられないでいる。自分のよさをとらえ肯定的な自己理解を深めるには、他者からの肯定的な評価が必要であり、自分のよさをとらえることの少ない児童は、ほめられるといった肯定的な評価を得ることのできる他者とのかかわりが少ないのではないかと考えられる。

ウ 設問による相関について

(ア) 「自分のよさをとらえること」と「他者へはたらきかける行動」の関係について

【表4-1】【表4-2】は、「自分のよさをとらえること(設問9)」と「他者へはたらきかける行動(設問4-1)」をそれぞれクロス集計し、自分のよさのとらえと他者へはたらきかける行動がどのように関係しているのかをみたものである。

【表4-1】 3年生(自分のよさをとらえること) × (他者へはたらきかける行動)

N = 3年生79 単位(人)

3年生		みんなを誘うことができる	仲のよい友だちなら誘うことができる	あまり誘うことができない	ほとんど誘うことができない
設問9	+	20	31	2	0
	-	4	12	6	4

【表4-2】 4年生(自分のよさをとらえること) × (他者へはたらきかける行動)

N = 4年生73 単位(人)

4年生		みんなを誘うことができる	仲のよい友だちなら誘うことができる	あまり誘うことができない	ほとんど誘うことができない
設問9	+	22	20	1	1
	-	8	15	3	3

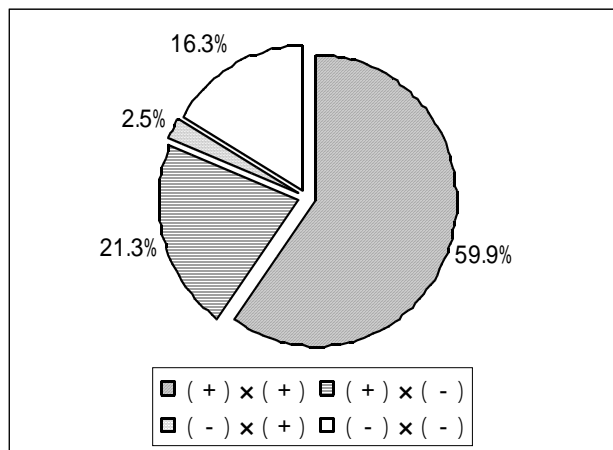
「注」 設問9において「よくある」「ときどきある」を「+」、「あまりない」「ほとんどない」を「-」として集計した
 これによると、両学年とも友達を誘うことができる児童には、自分のよさをとらえている児童が多いことが分かる。特に、「みんなを誘うことができる」と回答した児童の7割から8割は自分のよさをとらえている児童である。一方、「あまり誘うことができない」「ほとんど誘うことができない」と回答している児童のほとんどは、自分のよさをとらえられていないことが分かる。

これらのことから、他者を誘うことができる児童ほど、自分のよさをとらえている傾向があり、学級において他者とのかかわりをおして、自分のよさをとらえているものと考えられる。また、自分のよさをとらえることが他者へかかわることへの安心感や自信に結び付いていくものと考えられる。

(1) 「学級での生活の楽しさ」と「自分のよさをとらえること」の関係について

【図6-1】【図6-2】は、「学級での生活の楽しさ(設問1)」と「自分のよさをとらえること(設問9)」をそれぞれクロス集計し、学級での生活の楽しさと自分のよさをとらえることがどのように関連しているかをみたものである。

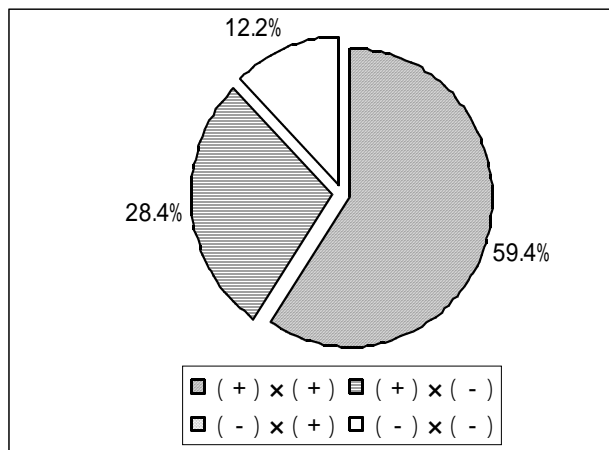
N=3年生80 単位(%)



【図6-1】 (学級での生活の楽しさ)

× (自分のよさをとらえること)

N=4年生74 単位(%)



【図6-2】 (学級での生活の楽しさ)

× (自分のよさをとらえること)

「注」 「よくある」「ときどきある」を「+」、「あまりない」「ほとんどない」を「-」として集計した
 これによると、学級での生活が楽しいと回答している児童の多くは、自分のよさをとらえている児童(「+」×「+」)であることが分かる。自分のよさをとらえていない児童でも楽しさを感じている児童(「+」×「-」)はいるものの、楽しさを感じていない児童のほとんどは、自分のよさをとらえられずにいる児童(「-」×「-」)であることが分かる。

これらのことから、自分のよさをとらえるためには、学級での生活に楽しさを感じる必要があるであり、楽しさの中で築いたり広げたりした他者との関係をおして、自分のよさをとらえていくこと

ができるものと考えられる。また、自分のよさをとらえることが安心感や自信となり、他者との積極的な活動が促進されて楽しさを感じることができてくるものと考えられる。

(3) 指導・援助試案作成上の課題

実態調査の結果から、指導・援助試案作成上の課題を次のようにまとめた。

ア はたらきかけることについて

- (ア) 友達を増やしたいと思っている児童は多いものの、方法面や感情面での抵抗感があること
- (イ) 学級での生活の楽しさを感じる事が少なかったり、他者へはたらきかけることが少なかったりすると、自己のよさをとらえにくくなる傾向があること

課題 1

児童が互いにはたらきかけることができるようにするために、他者との基本的なかわり方を身に付けさせるとともに、友達とかかわる楽しさを感じさせ、はたらきかけることへの抵抗感を取り除き、友達との関係を広げることができるようにする必要がある。

イ 認め合うことについて

- (ア) 他者との比較によって自己評価を低下させている児童があり、特に3年生にその傾向が顕著なこと
- (イ) 他者の肯定的な面より、自分の肯定的な面がとらえられていないこと

課題 2

児童が互いの違いやよさを認め合うことができるようにするために、互いの違いやよさに気付き、それを伝え合う肯定的な相互評価により自己理解や他者理解を深め、自他を大切にしようとするようにする必要がある。

5 中学年の児童の人間関係能力を育てることについての指導・援助試案

(1) 中学年の児童の人間関係能力を育てるための指導・援助に当たっての配慮事項

ア 活動の形態

学級集団を一つの基本とし、集団体験活動を行う。一対一のかかわりを、多くの他者と繰り返すことに重点をおくが、内容に応じて学級内に小グループを編成する。

イ 指導・援助の時間

指導・援助の実践場面は、短学活、学級活動の時間を基本とする。また、日常の生活や行事、教科学習などにおいても集団体験活動で取り上げた内容を取り入れる場面を意図的に設定し、定着を図るように配慮する。

ウ 指導・援助のプログラムの編成と実践上の留意点

中学年の児童の人間関係能力を育てるための指導・援助に当たっては、学級の実態や時期なども考慮し、プログラムを編成する。また、人間関係能力を育てるための二つの要素の指導・援助は、意図的・計画的に行うが、実態に応じて重点のかけかたに配慮する。

(2) 中学年の児童の人間関係能力を育てるための指導・援助試案

中学年の児童の人間関係能力を育てるための指導・援助試案作成上の課題をもとに、【表5】のように指導・援助試案を作成した。

【表5】 中学年の児童の人間関係能力を育てるための指導・援助試案

要素	活動の視点	活 動 内 容	活動の意義・留意点
は た ら か き か け る こ と	かかわることの楽 しさ	友達とのかかわり方を体 験する ・ 聞く ・ 誘う ・ 断る	他者との基本的なかかわり方を身に付ける ・ 基本的なかかわり方として、聞くことには 表情や態度なども大切であることに気付く ようにする ・ 友達に声をかけたりかけられたりするこ とをおして、よりよいかかわり方について 気付くようにする
	関係の広がり	友達とかかわる体験をす る ・ 一対一でかかわる ・ 複数でかかわる	集団内での安心感や集団の一員であること を感じ取る ・ 友達とかかわる楽しさを味わい、他者と かわる抵抗感を取り除くようにする ・ 友達との関係を広げるために、多くの友達 とかかわることができるようにする
認 め 合 う こ と	自己理解 他者理解	自他の違いやよさを発見 し、肯定的な相互評価を する ・ 違いを発見する ・ 違いについてメッセージ を送る ・ よさを発見する ・ よさについてメッセージ を送る	肯定的な相互評価を行い、自他を肯定的にと らえ、自己理解、他者理解を深める ・ 違いを否定的にとらえるのではなく、違いの 中にはよさがあることに気付くようにする ・ 違いやよさを肯定的に認めることが、自他を 大切にすることであることに気付くようにす る

「注」 活動内容の「 」は大項目、「・」は具体的な活動、活動の意義・留意点の「 」は活動の意義、「・」
は留意点

研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

この研究では、中学年の児童の人間関係能力を育てることについての基本構想を立案するとともに、人間関係に対する実態を把握し、それに基づいて指導・援助試案を作成した。

ここでは、それらの研究内容の成果についてまとめることとする。

(1) 児童の人間関係能力を育てることについての基本的な考え方の検討

先行研究や文献などをもとに、小学校における人間関係能力を育てる意義や必要性を検討し、中学年において集団体験活動を取り入れる意義を明らかにすることができた。

(2) 児童の人間関係能力を育てることについての基本構想の立案

先行研究や文献などをもとに、中学年の児童の人間関係能力を育てるための二つの要素、集団体験活動の進め方を検討し、中学年の児童の人間関係能力を育てる教育相談の基本構想を立案することができた。

(3) 児童の人間関係についての実態調査及び分析・検討

基本構想をもとに、中学年の児童の人間関係についての実態調査及び結果の分析から指導・援助試案に関する課題をまとめることができた。

(4) 児童の人間関係能力を育てることについての指導・援助試案の作成

中学年の児童の人間関係能力を育てることについての基本構想及びそれに基づく実態調査結果から明らかになった二つの課題をもとに、指導・援助試案をまとめることができた。

2 今後の課題

本年度の研究をふまえ、次年度は、中学年の児童の人間関係能力を育てるための指導・援助試案に基づいて、実践プログラムを作成するとともに、中学年の児童の人間関係能力を育てる教育相談の在り方について、実践的・事例的に明らかにしていきたい。

【引用文献】

國分康孝・中野良顯 編著、「教師の育てるカウンセリング」, 東京書籍, 2000, p.122

【参考文献】

吉森 護 編者, 「人間関係の心理学ハンディブック」, 北大路書房, 1991

南山短期大学人間関係科 監修, 津村俊充・山口真人 編者, 「人間関係トレーニング」,
ナカニシヤ出版, 1992

辻平次郎 著, 「自己意識と他者意識」, 北大路書房, 1993

内山喜久雄・高野清純 監修, 渡辺弥生 著者, 「ソーシャル・スキル・トレーニング」,
日本文化科学社, 1996

高木和子 編者, 「小学一年生の心理」「小学二年生の心理」, 大日本図書, 2000

落合幸子 編者, 「小学三年生の心理」「小学四年生の心理」, 大日本図書, 2000

落合良行 編者, 「小学五年生の心理」「小学六年生の心理」, 大日本図書, 2000

河村茂雄 編著, 「グループ体験による学級育成プログラム」, 図書文化社, 2001

津村俊充 編者, 「子どもの対人関係能力を育てる」, 教育開発研究所, 2002

